
或る同窓会

のりまき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
或る同窓会

【Nコード】
N9242I

【作者名】
のりまき

【あらすじ】
中学校の同窓会の幹事を任されている金子は、五年ぶりに同窓会を開く。そして、そこで真実を知ることになる――。

中学校を卒業して、最初の同窓会が行われたのは成人式の時だった。

中には、着物姿のまま出席した人もいたけど、私は普段着で参加していた。相変わらず、中学生のときの面影を残している人もいれば、パツと見ではわからない人もいたことを、今でも覚えている。私は、前者と言うより、差ほど変わらないらしかった。

皆、大人になったんだなあ、と周りの女子たちを見て思ってたっけ。化粧も様になって、口紅とアイシャドウだけの私なんかとは比べ物にならなかった。

それでも、皆と騒ぐのはあの頃と全く変わらない。皆、そういうときだけは、心も中学生に戻っていた。

今回は、もう何回目の同窓会かな。

成人式の時以来、毎年のように行われていたけど、いつしか一年おき、二年おきと間隔が広がっていった。それでも、人数が集まったのは曜日に関係なく、日にちを決めておいたから。

四月一九日。

特に、誰かがこの日にしようと決めたわけではない。たまたま、二、三年この日に同窓会を連続して開いたため、翌年からこの日に決められた。

私は長年幹事を務めていた。今回も例外なく、幹事は私。初めの方は委員長だった坂口さんが幹事を務めていたけど、坂口さんが幹事を務められなくなったとき、代理として幹事をさせてもらった。そこからは、私の役回りとなった。

前回から五年も経ってしまったことに、私は少し焦っていた。最低でも、三年に一回は開きたかったのだけど、幹事である私の都合が合わなかったばかりに、とうとう開けずにいた。

誰かに幹事を任せることは考えなかった。委員長でもないのに、自分から進んで幹事を務めておいて、都合が悪いから他の人をお願いなんて、とてもじゃないけどできない。

ともあれ、今年こそは同窓会を開ける。皆に会えるんだ。

たった一組だけだったけど、だからこそ、当時の思い出が深く刻まれてるんだと思う。行事も部活も、友達関係も恋愛事情も。こんな年になっても、鮮明に覚えている。

もちろん、都合により来れない人もいるけど、夜の八時に集まるように呼びかけた。場所は、相変わらず、駅前のコンビニの上にある居酒屋。中学生のころ、私の好きだった溝口くんがバイトをしていた場所。

「久しぶり、金子」

声をかけてきたのは、親友の真里菜だった。親友といっても、今となってはそれほど頻繁に会うことはない。

どの学年にも一人はマドンナがいる。例外はない。私たちの学年

では真里菜こそがマドンナだった。それは、今でもきっと変わらないと思う。それと同時に、やはり今でも、親友である真里菜がマドンナでいることを、私は誇りに思う。

マドンナの宿命とも言うべきなんだろうな。彼女は、一度も同窓会を欠席したことはなかった。誰もが憧れる存在であり続けるために。誰にでも癒しを与えられる存在であるために。

「金子は、ずっと変わらないね。中学からずっと無垢で、まるでアタシの本当の妹みたい。この、可愛いヤツめ」

そう言って、私の髪の毛をくしゃくしゃにしてくる。

「やめてよお。私たち、もういくつになったと思ってんの？ 四五よ、四五。おばさんじゃない」

真里菜の手を払いのけると、彼女はとぼけたような顔をして笑った。

中学生の頃の思い出は、まるで昨日のことのように覚えているのに、気づけば私たちはもう四五。自分の言葉が、むなしくも可笑しく思えた。

十分と経たないうちに、次々と旧友が流れ込んできた。いそいそと姿を現す委員長の坂口さんは、私にポツリと挨拶した。

堅苦しい挨拶もさることながら、各々の談笑が場を弾ませていく。私も興に乗ってきたころ、一人の老人が目に残った。

「遠藤先生！」

しわりと顔をくしゃくしゃにして、輪の中心に入ってくる。私たちの学年を支えてくれた、まさに恩師だった遠藤先生。いつも厳めしい顔をしているにもかかわらず、生徒の行いに褒めるときは仏のような笑顔を振りまいていた。今となっては、厳格な表情の面影なんて欠片もない。

「先生、こっちに来て“優しさの授業”してくださいよ」

私の席から離れたところで、昔の悪餓鬼が声を張り上げた。本当なら、そんな端の方じゃなく、今いる輪の中心でその話をして欲しかった。きつと、そう思ったのは私だけじゃないはず。

それは、とても授業と言えるものではなかった。それもそのはず。だって、その話をしたのはホームルームだったんだもの。

“優しさという名の凶器”——先生はしばしばそれを口にしていった。だから、この話は“優しさの授業”といっている。

誰かに何かを与えることが優しさなのではない。誰かに尽くすことが優しさなのではない。手を差し出し、助けてあげることが優しさなのではない。そんなものは“凶器”だ。優しさという名の“凶器”だ。いかに諭すか、いかに正すか、その人に対していかに厳しくなれるのか。そこに優しさがあるのだ。お前たちの考えている優しさは、最低限のマナーであり、甘えという“地獄”へと誘う“凶器”だ。いいか、それは優しさという名の“凶器”なんだぞ。

私は、未だに先生の言葉が理解できなかった。嘘を包み隠さず、安心を非ずものにするのが本当に優しさなのでしょうか。でも結局、その疑問を消失させることはできなかった。

「おい、金子、ちゃんと飲んでるのか？」

遠くへ席を移し“優しさの授業”をする遠藤先生に目を奪われて
いると、ふいに誰かが私に絡んできた。

溝口くんだった。今も昔も変わらない、好青年。

「しかし、金子も相変わらずだな。中学のときのまんまだ」

「ちよっと溝口くん、もう酔っ払っちゃったんじゃないの？
のおばさんという台詞じゃないよ」 四五

笑った顔も素敵。

これまた、私はとうとう彼に思いを告げることはできず、中学校
を離れてしまった。こんな調子で、色々な女子と絡むから彼は輝い
ているように思えた。誰からも好かれる人気者。本当にそう思えた。

それでも、私は彼と格別仲が良かったと自負している。ただ、仲
が良すぎたんだと思う。

「溝口、あまり金子をいじめないでよね」

発泡酒を片手に真里菜が割って入ってきた。

あの頃と変わらない。彼女のせい、というわけではないけど、私
が溝口くんに思いを告げられない原因がここにもあった。私のすぐ
そばにはいつも真里菜がいた。誰よりも仲が良かったし、誰よりも
かけがえのない友達だったから、それは当たり前だったんだ。

私は二人との関係を崩したくなかった。ずっと、仲が良いままで時間を刻んでいきたかったんだ。ううん、本当は怖かったのかもしれない。だから、崩したくなかったのかもしれない。

「か、金子……？」

途端に、溝口くんが呆気にとられたような声を出した。

「金子が、泣いてる……」

頬を伝うものを感じて、その言葉を聴いて、私ははっとした。私は、初めて涙を流した気がした。

「良かった。やっと、夢が叶ったよ！」

今度は、私が呆気にとられてしまった。はしゃぐ溝口くんと真里菜。委員長の坂口さんも口元を両手で覆い目を細めていた。

「あとは涙だけだったんだ。人間だった頃の金子に戻るためには」「良かったね、本当に良かったね、金子！」

——人間だった頃の、私？

私が遠藤先生の方を向くと、先生は何度も頷いていた。瞬間、私の脳裏に凍り付いていた記憶が融け始めた。

それは、中学三年生の真冬の出来事だった。卒業式が行われる少し前に、下の学年がお別れ会を開いてくれる。その恒例の行事がある当日、私は寝坊というしがない理由で遅刻していた。あとから入ってきて目立ってしまうことばかり気になって、とにかく学校へと

急いでいた。今更、どうしようもないことだけど、気づいたときには、私は光を失っていた。

「あの事故のあとね、金子は人形のように何も感じなくなって、何も話さなくなってしまったの」

私の物語を綴ってくれたのは真里菜だった。

「アンドロイドに近いのかもしれない。脳に機械を植えてね、一つずつ、感情と言動を思い出させてきたのよ。ただ……副作用なのかな。本当に人形みたいに、容姿は年をとっていなかった。不思議だよ。ね。年はとっていくのに、姿形は中学生のときのままだなんてさ」

皆の安堵する顔が私を覗き込む。

今流れているこの涙が、嬉しいのか悲しいのか、私にはわからなかった。本当なら、私が戻ってきたことを皆と分かち合うはずなんだけど、私にはどうしてもそれができない。

歓喜の顔の奥に、遠藤先生の顔が見えた。涙のせいでぼやけているけれど、皆とは違う表情を浮かべているのだけはわかった。先生は、何も言わずに頷いてくれた。

だから――

「それが、皆の隠し事だったんだね――」

言わなければならない――

「今度は、私の隠し事を、話すね——」

私が素直に喜べない理由。

皆が私に対して隠し事をしていたと言うことを、私は最初の同窓会ですでに知っていた。どんな隠し事なのかを知らないだけで、何かを隠しているのだと言うことくらいは知っていたんだ。

私たちが二五歳になる五回目の同窓会で、お返しと言うわけではないけど、私にも隠し事ができた。今も、その時と変わらず、全然嬉しくない隠し事。

私は、皆みたいに喜ぶことなんてできないよ。

「私が初めて幹事を務めたその同窓会で、この居酒屋と共に皆、炎に包まれてしまったの」

さつきまで明るかった居酒屋が、黒ずんだ廃墟へと変貌した。私と遠藤先生は知っていた、この場所に居酒屋なんてないことを。

「霊は年をとらないなんて、一体誰が考えたんだろうな」

言いながら遠藤先生は私の方へ歩み寄ってきた。

あの時、先生を同窓会に呼ぼうとした私は幹事でありながら、遅刻してしまった。

「隠し事がわからないままお別れは嫌なんだとき、金子は」

ようやく私の所まで来た先生は、真里菜の方を向いた。決して責

めるわけではなく、当時は滅多に見られなかった微笑を真里菜に向けている。

その微笑に答えて、真里菜は私の方を向いてくれた。

「ありがとう……教えてくれて」

「本当はさ、俺たちもわかってたんだぜ。金子が何か隠し事をしてるって」

次に口を開いたのは溝口くんだった。垣間見える、中学生のときの瞳が今も私を焦がせる。

坂口さんが彼の後ろからお辞儀をしてくれた。

ふと溜息をつくとき、目の前には暗闇が広がるばかりだった。お別れの言葉は何度もいつてきた。でも、今度こそ本当のお別れなんだ。

「先生。私、先生の言葉が少しだけわかったような気がします」

「隠し通していくことだけが、優しさなんかじゃない」

「はい」

とうとう、私たちの同窓会が終わってしまった。

「一つ、お願いがあるんです、先生」

「なんだい？」

ふと、もう一つ終わらせなければならぬことを思い出した。

「卒業証書、ください——」

【完】

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9242i/>

或る同窓会

2011年10月3日10時58分発行